

二〇二六年度

日本近世文学会春季大会

大会プログラム
研究発表要旨

期日 五月三十日(土)・五月三十一日(日)・六月一日(月)

会場 二松学舎大学九段キャンパス

〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16

日本近世文学会春季大会のご案内

会員の皆様にはますますご清栄のことと存じます。
二〇二六年度春季大会を開催いたしますので、ご案内申し上げます。
左記をご確認いただき、お申し込みください。

記

◆参加の手続き

・参加の申し込みと参加費・懇親会費の支払いは、Peatixまたは郵便振替をご利用ください。
締切は五月十一日です。Peatixでの申し込みは同日十三時です。

参加費は一五〇〇円、懇親会費は一般七〇〇円、大学院生・学部生三〇〇〇円です。

【Peatix】

URLまたはQRコードからアクセスしてください。

URL <https://2026-spring.peatix.com>

【郵便振替】

郵便局備え付けの振替用紙に、金額の内訳と参加日を明記してお支払いください。

振替番号・加入者名 〇〇一六〇一一一〇二八二三 日本近世文学会

◆領収書・出張依頼状

・学会印の入った領収書が必要な方は、学会事務局へご連絡ください。Peatixをご利用の場合、システム上で領収書の発行が可能です。
・出張依頼状が必要な方は、氏名・職名・提出先・出張期間を明記し、学会事務局へご連絡ください。



◆大会当日について

- ・対面形式で開催します。オンライン中継はありません。
- ・会場受付で資料集をお渡しします。不参加の方への資料集の郵送はいたしません。
- ・大会二日目の昼食の用意はありません。
- ・大会三日目の文学実地踏査は、会場にて資料を配付しますので、各自・各グループでお回りください。

◆託児について

- ・会場受付で託児料金補助申請書を配付します。必要な方はお受け取りください。
- ・大会会場の近くに次の託児施設があります。

子育てひろば「あい・ぼーと」麹町(管理運営：千代田区、NPO法人あい・ぼーとステーション)

<https://www.ai-por.jp/kojimachi/>

キッズルームシビック(文京区、運営：ビジョンハーツ株式会社)

<https://www.city.bunkyo.lg.jp/b022/p001660.html>

日本近世文学会および大会会場校が託児サービスを委託しているわけではありません。利用をご希望の場合は各自で施設にお問い合わせいただき、諸条件についてご理解・ご同意の上、お申し込みください。日本近世文学会および大会会場校は託児に関するトラブルや事故等について責任を負わないことを申し添えます。

◆日本近世文学会春季大会会場校代表

吉丸雄哉(二松学舎大学) kyoshimaru@nishogakusha-u.ac.jp

◆日本近世文学会春季大会実行組織

稲葉有祐(和光大学)・小林ふみ子(法政大学)・高松亮太(東洋大学)・

水谷隆之(立教大学)・湯浅佳子(東京学芸大学)

◆日本近世文学会事務局代表

佐藤至子(東京大学) info@kinseibungakukai.com

〒113-0033

東京都文京区本郷七-三-一

東京大学文学部国文学研究室内

大会プログラム

【会場】二松学舎大学九段キャンパス

【行事】

第一日 五月三十日（土）

委員 会 （二二・〇〇～二三・三〇）

委員会 会場 一号館六階 六〇五教室

大会 受付 （二三・二〇）

開 会 （二三・五〇）

研究発表会 （二四・〇〇～二六・〇〇）

研究発表会 会場 一号館 中洲記念講堂

1 『酔興_ニ孟八伝』の影響―万象亭の戯作との関わりを中心に―

学習院大学（院）

吉田慎一朗

2 黄表紙における『平家物語』 版本挿絵利用―恋川春町画作『万載集著微来歴』を中心に―

法政大学

小林ふみ子

3 宝曆・明和・安永期の吉原本の出版

実践女子大学文芸資料研究所客員研究員

佐藤 悟

日本近世文学会賞授賞式・総会（二六・一〇～二七・三〇）

懇 親 会 （二八・〇〇～二〇・〇〇）

懇親会 会場 一号館地下一階 学生食堂

第二日 五月三十一日(日)

大会 受付 (二〇・二〇)

研究発表会 (二〇・五〇)～(二一・一〇)

研究発表会場 一号館 中洲記念講堂

4 明治期における荻生徂徠「天狗説」の受容と展開 信夫恕軒、津田真道、大内青巒 | 早稲田大学(院) 竹中 創亮

5 『好色一代女』における語り手の「機構」——正気を失う一代女の物語 | 佛教大学 浜田 泰彦

昼 休 み (二一・一〇)～(二一・四〇)

編集委員会会場 一号館六階 六〇五教室

研究発表会 (二二・四〇)～(二二・五〇)

研究発表会場 一号館 中洲記念講堂

6 洒落本『列仙伝』宝暦俳壇評の再検討——「ひとり武者」ならびに「唐土の孔子は門人三千」について | 京都女子大学 野澤 真樹

7 『海道狂歌合』における狂歌と絵画との関係について——秋成の漢文・狂歌・俳諧 | 早稲田大学 池澤 一郎

閉 会 (二二・二〇)

第三日 六月一日(月)

文学実地踏査 会場にて資料を配付します。

図書展示 資料で辿る二松学舎 展

日時 五月二十五日(月)～七月十一日(土) 一〇・〇〇)～(一六・〇〇

場所 九段キャンパス一号館地下三階 二松学舎大学大学展示室

研究発表要旨

『酔興孟八伝』の影響

—万象亭の戯作との関わりを中心に—

学習院大学(院) 吉田慎一郎

『酔興孟八伝』は、東京大学総合図書館に一点のみ現存する作者不明の写本である。序文は万葉仮名で記した戯文となっており、「田分堂」の署名と安永五年(一七七六)の成立であることが記されている。本文は巻之一〜五で構成され、その内容は、主人公である孫氏孟八郎が諸国遍歴中に失敗を繰り返すという笑話短編集となっている。孟八郎は、巻之一・二では主にいかさま軍師として活躍する一方、巻之三〜五では歌学者、連歌師、浄瑠璃作者、算術家、医者といった様々な職業を転々とする。

この『酔興孟八伝』を読むと、天明期の万象亭(森島中良)作の黄表紙が、本作に着想を得ている可能性が高いことがわかる。

まず『酔興孟八伝』巻之一・二で孟八郎が披露する軍術は、万象亭作『さうは虎の巻』(天明四年(一七八四)頃刊か)に見られる独特な滑稽見立ての軍術に影響を及ぼしている。

また『酔興孟八伝』巻之三で孟八郎が手掛けた出鱈目な浄瑠

璃「関東土産捷徑太平記」は、万象亭の黄表紙初作とされる『万象亭戯作濫觴』(天明四年刊)作中の架空の浄瑠璃「源頼光手早物語」との内容・使用語句の類似が見られ、更に従来典拠不明とされてきた山東京伝の滑稽本『実悪目利捷徑太平記』(文化元年(一八〇四))とはほとんど同一のものである。

本発表では、万象亭の黄表紙研究における重要資料として『酔興孟八伝』を提示すると共に、その発想が山東京伝や式亭三馬のみならず、明治の講談や文芸にも取り入れられたことを示す。

黄表紙における『平家物語』版本挿絵利用

—恋川春町画作『万載集著微来歴』を中心に—

法政大学 小林ふみ子

恋川春町画作『まんざいしゅうちやびらいれき万載集著微来歴』(天明四(一七八三)年刊)は、前年刊の四方赤良編『万載狂歌集』の大当たりと、作者自身の狂歌界への急接近を背景に、源平の戦いを狂歌師らの茶番として描いた春町の代表作の一つである。『江戸の戯作絵本』(一九八一年原刊、二〇二四年筑摩書房復刊)所収の宇田敏彦氏による校注によつて読みやすいかたちで提供され、いくつかの論考も備わるが、挿絵の出典に言及されたことはなかった。

本発表では、有名場面をちやかす同作の五図が、構図、人物の姿勢や事物の配置などから『平家物語』延宝五(一六七七)

年版の挿絵を利用していることを指摘する。併せて前年刊行の春町画作『猿蟹遠昔噺』および四方赤良作・喜多川歌麿画『源平総勘定』、山東京伝画作『冷哉汲立清水記』（寛政二（二七九〇）年刊）についても同版を参照した可能性を考える。

草双紙などの挿絵における先行図様撰取の研究は、鈴木重三氏による先駆的な諸論考以来、少しずつ進められてきた。たんなる画像の利用にとどまらない、作品理解にもかかわる要素として、あらためて画像の典故考察の意義をたしかめたい。さらに、本発表では戯作における源平合戦の原拠の問題を考える。各場面は何に拠るのか。『平家物語』か、謡曲や人形浄瑠璃諸作か。扇の的を掲げた官女玉虫の名、二位の尼の辞世などから『源平盛衰記』とされることも多いが、これらの挿絵利用からは『平家物語』絵人版本の参照が確認できることになる。

宝曆・明和・安永期の吉原本の出版

実践女子大学文学資料研究所客員研究員 佐藤 悟

本発表は吉原細見や絵本などの吉原本の出版、流通、需要について明らかにし、板元や地本問屋についての新たな理解を求めようとするものである。

吉原細見については、当初、鶴屋喜右衛門、いがや、山本九左衛門、鱗形屋孫三郎などの地本問屋が出版を担当、やがて安

永期になると葛屋重三郎が吉原細見株を独占したという理解がなされてきた。ところが吉原細見株という概念については、これまで考察がなされていない。吉原細見出版の背景には『新吉原規定集』によれば「人別帳」「遊女屋名題帳」「遊女名前帳」の整備があり、『洞房古鑑』には「遊女他出」の問題が指摘される。また未成年であった禿についても厳密に管理されていたようである。さらに吉原細見を調査すると山本屋板については現金屋八蔵、鱗形屋板については本屋三四郎、小泉忠五郎、葛屋重三郎、木村屋善八が細見改所として板行にあたっていたことが知られる。細見改所について「蔵板」と明記されている例もあり、山本屋や鱗形屋の役割について再検討する必要がある。

明和二年刊『華よそほひ』（伊勢屋吉十郎等板）、明和七年刊『青楼美人合』（小泉忠五郎等板）、安永五年刊『青楼美人合姿鏡』（葛屋重三郎等板）は吉原細見の構成を踏まえた絵本である。その出版は細見改所が行ない、地本問屋や書物問屋が流通に関わっていたことが看取される。これも吉原細見の板元や流通の実態を示唆するものであろう。

明治期における荻生徂徠「天狗説」の受容と展開

— 信夫恕軒、津田真道、大内青巒 —

早稲田大学（院） 竹 中 創 亮

「天狗説」は天狗に関する考証を行う文章の総称である。近世を通じて、荻生徂徠の「天狗説」（『徂徠集』巻十六）が国学者、戯作者にまで広く読まれた。徂徠は「人神」を弁別せず、「神」という存在を「仙」「仏」「魑魅罔兩」とさかしらに命名・分類する人間の「知」を批判した。

幕末・明治期の漢学者信夫恕軒が著した『読徂徠翁天狗説』（『恕軒文鈔』初篇、明治十年）は、徂徠「天狗説」の読後評でありながら、「天狗」の語を「一伎一芸を挟みて傲然として人に誇詡」する者の謂に読み換えることよって、詩文書画を以て人を「魅す」学者や文人、殊に護園社の批判へと展開した。また「与某書記官論天狗書」（同・三篇、同二十二年）は、恕軒自身を「天狗」と難じた書記官に反駁し、徂徠の「天狗説」等を知らぬ对手的「不学」を難するものである。

明治期の「天狗説」は、明六社の津田真道の「天狗説」（『明六雜誌』第十四号、同七年）や漢学者石川鴻斎の「天狗説」（『夜窓鬼談』、同二十二年）にみられる如く、文明化した社会における「天狗」＝「神」への不信心と表裏でもあった。その中で、恕軒と交流のあった仏教学者大内青巒の「天狗説」（『共存雜誌』

第五十九・六十号、同十三年）は、津田説への反論を通じて、人知を超えた存在に対する文明の態度を批判し、「鬼神の有無」という伝統的な議論を相対化する点で際立っている。

『好色一代女』における語り手の「機構」

— 正気を失う一代女の物語 —

佛敎大学 浜 田 泰 彦

西鶴『好色一代女』は、「けしずみ」等既存の懺悔ものの「語る・聞く」という単純な構造をとらず、好色庵を訪れた二名の色好みの求めに応じて一代女が過去の男性遍歴を告白した内容を語り聞かせ、さらに好色庵の様子を覗き見る男が聞くという回りくどい語り手の「機構」を有する作品である。そのため、一代女の一人称による語りと三人称が混在する「墨絵浮氣袖」（巻四ノ二）のような事例が頻発し、これを構造的破綻と理解するのも無理からぬことではある。一方で、中嶋隆氏（『好色一代女』の叙述の構造—「性」からの照射—『国文学研究』第百集）や、西田耕三氏（『主人公の誕生』ぺりかん社）のように肯定的に理解する先行研究もある。

発表者も肯定的な立場をとるが、その根拠として首章の設定を重視したい。冒頭「美女は命を断つ斧」と古人もいへり」に始まる箇所が常識的な色道への戒めが述べられるのに対し、

終末部一代女が「女子十八九までも竹馬に乗り」云々と述懐する箇所は、「誇張がある」（『新編全集』頭注）と理解され対照的である。首章から常人を超える恋愛遍歴を重ねてきた一代女の語りには認知の歪みが生じており、そこに「常識」を持ち込む役割を担ったのが、好色庵を覗き見る男の語りであった。作品の進行とともに男の語り手による介入は減退するが、一代女の語りに没入しないこの語り手こそが、一代女が正気を失っていく物語として仕立てられた『好色一代女』には必要不可欠な存在であった。

洒落本『列仙伝』宝暦俳壇評の再検討

—「ひとり武者」ならびに「唐土の孔子は門人三千」について—

京都女子大学 野澤真樹

宝暦十三年（1763）の洒落本『列仙伝』において当代の諸道に関する記述の大部分を占める宝暦俳壇評は、上田秋成が彼の俳号「漁鳶」をもじった「ぞゑん」として言及されることから、秋成の青年時の動向を伝えるものとして重視されてきた。本発表はこの宝暦俳壇評が、秋成に関わる二つの点において、現在に至るまで「誤読」されてきた可能性を指摘するものである。

第一に、『列仙伝』の記述をもとに青年時の秋成が俳諧の「ひとり武者」と呼ばれたという説に関して述べる。本文中、「ぞ

ゑん（漁鳶）」と併記される他の俳諧師の俳諧活動と、「ひとり武者」前後の表現から、この宝暦俳壇評において「ぞゑん（漁鳶）」は「ひとり武者」ではなく「しれ者」と評されたと理解するのが妥当と考えられる。

第二に、本文中に「点者」とある人物が「唐土の孔子は門人三千と御さるが、私は三千二百人弟子がござります」と述べる箇所である。従来、この記述は半時庵淡々を諷刺するものであるとされ、秋成の『胆大小心録』との類似が指摘されてきた。しかし、『列仙伝』本文中の淡々に関する記述と、淡々の活動状況から、右の記述は秋成の『胆大小心録』とは異なる立場にあると考えられる。

以上の点より、本発表では所謂「大阪騒壇」の重要文献としての『列仙伝』を当時の状況に則して検討しなおすことの必要性を提起する。

『海道狂歌合』における狂歌と絵画との関係について

—秋成の漢文・狂歌・俳諧—

早稲田大学 池澤一郎

上田秋成の狂歌に河村文鳳と渡辺南岳との絵画を配した『海道狂歌合』（美濃版上下二冊）は、文化八年冬に京都吉田屋新兵衛・大坂河内屋喜兵衛から合梓されて、版を重ね、下冊の絵

画だけが独立して『海道双画』、『手競画譜』と改題して普及する。本書改題本については、正岡子規が『病床六尺』の中で、河村文鳳の絵画についてのみ、その趣向を論じた。戦後は上下二冊本について、古典文庫『秋成狂歌集』の丸山季夫氏の解説（昭和四十七年）、和泉書院の『文化八年版本 海道狂歌合』の鷺山樹心氏の解説（昭和五十六年）があり、ニューヨークパブリックライブラリー所蔵の卷子本を翻字し、友山文庫本と対比する浅野三平氏の業績（平成十九年『増訂秋成全歌集とその研究』）、長島弘明氏の翻字と書誌解題（平成十六く十八年科研基盤研究（C）研究成果報告書『上田秋成の文業の書誌学的・文献学的研究』）がある。

本発表では、まず、河村文鳳の漢文序によって、秋成の狂歌が先に成ったこととして、版本登載の秋成の狂歌二十九首（右ニューヨーク本では三十首、異同あり）を文鳳・南岳が秋成の狂歌の内容を精密に理解した上で、両者が狂歌と不即不離の關係において、各々の絵画の趣向構成を考案したことを立証する。次に本書に見える秋成の狂歌における俳諧性を、秋成発句が蕪村発句から受けた影響を措定することを通して具体的に述べ、読本の作者という規定を越える秋成の人間観を提示したい。

会場へのアクセス

東京メトロ東西線・半蔵門線、都営新宿線「九段下」駅2番出口から徒歩8分
JR総武線、東京メトロ有楽町線・南北線、都営新宿線「市ヶ谷」駅から徒歩15分
東京メトロ半蔵門線「半蔵門」駅5番出口から徒歩10分
JR総武線、東京メトロ有楽町線・東西線・南北線、都営大江戸線「飯田橋」駅から徒歩15分

会場案内図



